

“友好への思い 中国語で表現”

第 33 回全日本中国語スピーチコンテスト

(公社)日中友好協会主催の「第 33 回全日本中国語スピーチコンテスト全国大会」が 1 月 10 日、東京・文京区の日中友好会館で開催された。全国 20 の都道府県大会を勝ち抜いた 20 人が出場し、高校生・一般・大学生の各部門に分かれ学習の成果を競い合った。大会で最も印象が強かった出場者に贈られる日中友好協会会長賞には東京都代表の主婦・加藤敬子さんが選ばれた。

大会は外務省、文部科学省、中国教育省、NHK などが後援、全日空などが協賛した。開会式で主催者を代表してあいさつした岡寄温理事長は「33 回にわたり続けているのは皆さんのご支援のおかげ。中国理解のために中国語を学ぶことの意義や役割は大きい。この大会が日中両国関係の改善につながるよう願っている。今後は都道府県大会をより活性化させるために努力していきたい」と述べた。

大会は、今回から高校生・一般部門がそれぞれ独立し、大学生部門を含めた 3 部門構成に。これにより、学習時間をなかなか作れない社会人にも入賞のチャンスが増えた。

大会は 5 分以内のスピーチと中国語での質疑応答で競われ、質問は特別審査員を務めた続三義・東洋大学教授と謝宏宇・中国国際放送局東京支局長が担当した。スピーチだけでなく、ヒアリングも含めた中国語の総合的な能力が審査された。

高校生部門では、同性愛をテーマにスピーチした愛知県代表の神谷菜々子さんが、一般部門では、後に息子の嫁となる中国人



第 33 回大会の様。1 月 10 日、東京・文京区の日中友好会館で



橋本逸男副会長から協会会長賞を授与された加藤さん(右)



出場者の家族や友人などが多くが来場した

女性との旅行体験を振り返り、日中友好への思いを表現した東京都代表の加藤敬子さんがそれぞれ第1位となった。

一方、年々ハイレベルとなっている大学生部門は、中国留学中に重慶市で防空壕を発見したことをきっかけに、日中両国の歴史を考えるようになったことを紹介した大阪府代表の小田真璃奈さんが第1位を獲得した。また、スピーチ内容などを含め、最も印象が強かった出場者に贈られる日中友好協会会長賞には一般部門第1位の加藤さんが選ばれた。

審査委員長の塚本慶一・杏林大学大学院教授は「起承転結が明確で相手を意識して伝えようという思いが感じられた」と評価した。各部門第1位の3人には、副賞として中国旅行が贈られた。

会場には、出場者の家族や友人などが応援に駆けつけたほか、中国語を学んでいる人や留学生、過去の出場経験者などが来場し盛り上がった。手作りの横断幕を掲げ、声援を送る人も見られた。

すばらしい内容に感動

大会後に行われた懇親会であいさつに立った汪婉参事官は、33回続くスピーチ大会に敬意を表した上で、「スピーチ内容に皆さんの中国や中国語に対する思いが表れていて、すばらしく、とても感動した。大学生部門1位の小田さんの『歴史を変えることはできないが、自らの行動で平和を守ることはできる』という言葉が印象に残った」と述べた。

さらに汪婉参事官は、日本人が、とりわけ日本の若者が中国語を学ぶことの意義の大きさを強調し「引き続き中国語学習を頑張ってもらいたい」と激励した。懇親会には審査員全員が参加。アドバイスを求める出場者も多く、審査員たちは時間の限り熱心に答えた。

汪婉参事官が懇親会で激励



中国大使賞を授与した汪婉参事官（左）と受け取った高校生部門第1位の神谷さん

愛



高校生部門第1位
愛知県代表
光ヶ丘女子高等学校
3年
神谷 菜々子

結婚は男性1人、女性1人で成立するものである。皆さんはこれを正しいと思いますか、それとも間違っていると思いますか。

「ねえねえ、どうしてあの子は休憩のたびに彼女に会いに来るの?」「知らないの、あの二人は付き合っているんだよ」「えっ、まさか2人とも女の子だよ?」「なんでそんなに驚くの。2人がおかしいと思うの?」

私は昨年台湾に一年間留学しました。そして台湾は同性愛に対して比較的寛容だと気付きました。最初は女子高だからだと思いましたが、最も驚いたことは、誰も彼女たちを変だと思っていなかったことです。

皆さんは同性愛に対してどんなイメージがありますか?私は同性愛者のカップルが一体どんな風なのか全く知りませんでした。そこで観察し始めました。その子は女の子だけど彼女がいます。私は、彼女たちは実際普通の男女のカップルと何も変わらないし、特別でもなく、性別が異なるだけだと知りました。事実、私は中学生の時に女の子を好きになったことがあるし、今の好きな人も女の子です。彼女のことが大好きだけど、私は同性愛者ではありません。彼女が好きだけだし、男の人を好きになることもあります。インターネットでこのような人をバイセクシャルと呼ぶことを知りました。

アメリカでは同性婚が合法になりました。最近日本の渋谷でも同性愛に関する条例ができましたがまだ結婚はできません。多くの同性愛者が結婚の権利を求めています。自分の家族が欲しいのです。私は日本も同性婚を合法にすべきだと思います。結婚の権利も基本的人権の一つです。同性愛を気持ちが悪いと思うのはかまいません。一人一人の考え方は違います。必ず同性愛を受け入れろとは言いません。しかし彼らを異常だと思わないでください。そして同性愛は決して少数ではないことも忘れないでください。もしあなたの子どもが万が一同性愛者だと分かったら、尊重してください。自分は悪い親だなんて思わないでください。

私は18歳です。本当の愛なんてまだ分かりません。彼女への気持ちも愛情かもしれないし、友情なのかもしれません。しかし私は性別ではなくその人の価値で誰かを愛したいということだけは言えます。私たちは皆唯一無二のかけがえのない存在です。世界には様々な愛があり、私はどんな愛も尊重します。愛に正しいも間違いも、性別による制限もありません。男性だろうと女性だろうと、愛しているならそれは愛と呼んでいいのです。

家の中の日中関係



一般部門第1位
東京都代表
主婦
加藤 敬子

7年前、消防士である次男は全国消防技術大会に東京都代表として出場する事になりました。わが家の日中関係は「母さん、ようちゃんと2人で応援に来てね」という次男からのメールで始まりました。ようちゃんとは次男の嫁の呼び名で、彼女は中国人、日本語が上手です。当時2人はまだ結婚前で、私はまだ数回しかようちゃんに会った事はありませんでしたが、一緒に九州小倉まで次男の応援の旅に行くことに決めました。

出発の日、私はようちゃんと仲良くなれるチャンスと思いながらもドキドキして空港に向かいました。空港に着くとようちゃんはニコニコ顔で現れ、私の緊張もすぐにほぐれました。機内では何かと私に声をかけてくれました。小倉に着いてから夕食のときにも、私が値段も構わずに何かおいしい物を探していると、「母ちゃん、高いのはもったいないからいらないよ、普通にしよう」と言って気づかせてくれました。

小倉は私も初めて訪れた土地で地図だけが頼りです。大会当日、会場への道のりも私のミスで遅れそうになり焦ってしまいましたが、ようちゃんは「母ちゃん、大丈夫だよ、心配しないで」と、笑顔で接してくれました。大会は私たちの大きな声援が届き、次男のチームは全国2位となりました。試合後、次男と会ったようちゃんは嬉し涙でクチャクチャの顔でよるこんでいました。2人のそんな姿を見て私も幸せいっぱいになりました。

その後しばらくして、私は、ようちゃんと中国語でお喋りしたいと思い、中国語を習い始めることにしました。現在2人は結婚しています。ようちゃんがわが家にお嫁に来てから、私とようちゃんの交流も増え、家族も今まで以上に中国に関心を寄せるようになりました。ようちゃんはわが家に新しい風を吹き込み、私たちに飾らないお付き合いと相手を気づかうことの大切さを教えてくれました。

私はようちゃんとわが家の日中関係をもっと発展させるつもりです。そして、日本と中国がこの先ずっと、もっともっと仲良くなることを願っています。

私の夢は、ようちゃんや中国にいるご両親や友達と中国語でお喋りする事です。さらに、2020年の東京オリンピックでは、ボランティアとして大会のお手伝いをしたいということまで広がっています。

繋げよう友好ブリッジ



大学生部門第1位

大阪府代表

神戸市外国語大学3年

小田 真璃奈

旅行はお好きですか？ 私は旅行が大好きで、四川での留学中にも様々な場所に足を運びました。壮大な樂山大仏や九寨溝などです。また、「重慶」という重要な都市にも行きました。

「重慶」という街に対する第一印象はその山の多さです。「山城」という別名も頷けます。重慶の街を歩くと、道沿いの「山洞」が目につきます。それらは売店や車の修理所、さらには地下鉄の駅に使われていました。初めは、貧しいために山の麓に穴を掘って商売をすることで、なんとか生活しているのかな、と思っていましたが、しばらくして、それらは実は、第二次世界大戦時にできた防空壕だと知りました。

当時の中国政府は重慶に置かれており、日本軍はこの重慶に対して長期にわたり大規模な爆撃を行い、その無差別爆撃はおびただしい数の人民の命を奪いました。重慶の歴史を知らずに、「旅行気分」でやってきてしまった無知な自分にとっても恥ずかしくなりました。至るところで目に入ってきた防空壕、戦争がこの街に残した傷跡は、私を複雑で重い気持ちにさせました。

留学を終えて日本に帰る日のことです。タクシーで空港に向う間、運転手さんがたまたま日本の話題に触れて「日本人は本当に悪い奴らだ！日本人はむごい！日本はダメだ」などと言い出したのです。私はどうしていいかわからず、とりあえず黙っていましたが、タクシーを降りる間に思い切ってこう言ってみました。

「おじさん！私ね、さっきおじさんが言っていた、すごく悪い日本人だよ！」。おじさんはとてもビックリしました。「え？まさか日本人だって、これは失礼！中国へようこそ！ようこそ！」

おじさんは続けて言いました。「私が言ったのは、日本が戦争のときにとっても残虐で恐ろしかったからだ。国同士は衝突してしまうこともあるが、人と人の交流にはなんの問題も無い！君を歓迎するよ」。このことで、私は日中両国の歴史と友好についてより深く考えるようになりました。

光陰矢の如し。戦争が終わって70年の月日が経ちました。友人の中国人は、ずっとあの悲しい歴史を忘れはしません。けれども、いざ日本人と向き合う時には、いつも友好的です。なぜなら、人と人との感情こそが真実のものであるとはっきりとわかっているからです。未来は、遠くなっていく歴史の上だけではなく、人と人との真実の感情の上こそ築かれていくものなのではないでしょうか。日中友好に貢献することは私の夢です。